

JAILA 第7回全国大会

学会プログラム

鶴見大学

平成30年3月10日（土）

JAILA

The Japan Association of International Liberal Arts

日本国際教養学会

大会概要

【日時】 平成30年3月10日(土) 9:20～ ※受付開始(501教室) 8:30～

【会場】 鶴見大学 1号館
〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3
※末尾に、キャンパス構内配置図を掲載してあります。



鶴見大学 Web サイトより：
<http://www.tsurumi-u.ac.jp/about/accessmap/popup02.html>

【交通】 新幹線は新横浜駅か品川駅から鶴見駅へ、羽田空港も京急線にて京急鶴見駅に直通。詳細やその他の経路に関しては、HPをご参考ください。

(参考 URL) 鶴見大学 Web サイト

- ① [アクセスマップ](#)
- ② [キャンパスマップ](#)



【参加費】 当日会員 1,000 円、学生 (フルタイム) 無料、(鶴見大学教職員無料)

【懇親会】 時間：18:30～20:30

場所：[キリンビール横浜工場レストラン ビアポート \(リンク\)](#)

会費：6,000 円 (学生 3,000 円)

【問い合わせ先 (JAILA 事務局)】

〒700-8530 岡山市北区津島中 2-1-1

岡山大学全学教育・学生支援機構

基幹教育センター外国語教育部門

那須雅子 研究室

電子メールアドレス：office@jaila.org

大会当日の緊急連絡先：090-3179-6813 (寺西)

JAILA 第7回全国大会プログラム

8:30-			
受付 (501教室)			
開会式 (501教室)			
教室	402教室	403教室	507教室
Session 1 司会	坂本 南美 (岡山理科大学)	土屋 結城 (実践女子大学)	志子田 祥子 (東京大学)
9:30-10:00	「ディベートの文体：米大統領選テレビ討論会の分析を題材に」 金谷和香・寺西雅之 (兵庫県立大学)	「図書館での「ぬいぐるみお泊まり会」活動から考える不可知論—科学的思考と想像力の境界線」 杉本 裕代 (東京都市大学)	「演劇ワークショップが大学生のコミュニケーションに対する態度に与える影響—定性データに基づいた分析—」 岩中 貴裕 (山口学芸大学)
10:00-10:30	「ラオスにおける法整備に向けた法学教育の現状と課題—首都と地方の比較研究—」 乾美紀・橋本英司 (兵庫県立大学)	「読後ディスカッションで何が語られているのか：書記記録分析の試み」 草薙優加・深谷素子 (鶴見大学)・小林めぐみ (成蹊大学)	“The Effects of Pushed Output Activity in Written Recall Task” マーティン 宏美 (文教大学)
10:30-10:40 休憩			
Session 2 司会	乾 美紀 (兵庫県立大学)	大西 好宣 (千葉大学)	久世 恭子 (上野学園大学)
10:40-11:10	「大学入試センター試験が映し出す英語—電子コーパスとして読む英語問題」 北和丈 (東京理科大学)・樫村真由 (東京工業高等専門学校)・伊澤高志 (立正大学)・佐藤蘭香 (麗澤大学)・瀧口美佳 (立正大学)・土屋結城 (実践女子大学)	「地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ループリックに関する実践的研究 (1)—学修プロセス構造の可視化を目指して—」 佐藤大介・鈴木舜 (くらしき作陽大学)・高橋香代 (岡山大学)	「新学習指導要領における英語音声指導内容の検討—“intelligibility”の概念整理をとおして—」 和田 あずさ (兵庫教育大学)
11:10-11:40	「英検二次面接試験「準2級」の絵の描写で用いられる動詞の特徴」 竹野純一郎・松浦加寿子 (中国学園大学)	「日本の伝統芸能「落語」が海外での日本語教育におよぼす効果」 阪田昌樹・松田真奈美 (兵庫県立明石西高校)・大内幹雄 (兵庫県立大学)	「英語スピーキングの流暢さを促す指導の工夫」 麻生 雄治 (長崎県立大学)
11:40-12:30 ポスター発表 (506教室)			
12:30-13:20 昼食			
教室	402教室	403教室	404教室
Session 3 司会	内山 八郎 (同志社大学)	マーティン 宏美 (文教大学)	那須 雅子 (岡山大学)
13:20-13:50	「新聞報道とグローバル人材」 大西 好宣 (千葉大学)	“Reinvigorating the Liberal Arts as Transformative Praxis in the Japanese University” David Kennedy (日本大学)	ワークショップ 「大人にもアニメーション！—スペイン式読解力育成のすすめ」 講師：河西 由美子 (鶴見大学)
13:50-14:20	「英国の地方都市における移民問題」 庄司 俊恵 (大阪経済法科大学)	“Censoring National Shame: A Comparative Lesson on Japanese Postwar Denial of the Wartime Effort to Eradicate Korean Culture with American Unwillingness to Confront the Aerial Bombing of Civilian Populations in Japan, Korea and Southeast Asia” Charles Cabell (東洋大学)	
14:20-14:50	「関西福祉大学における文章力向上の取り組みについて」 溝端剛・上野輝夫・半田結・有田伸弘 (関西福祉大学)	“On Teaching Multiliteracies and Multiperspectivism” Joff P.N. Bradley (帝京大学)	
14:50-15:00 休憩			
教室	402教室	403教室	507教室
Session 4 司会	伊澤高志 (立正大学)	瀧口 美佳 (立正大学)	佐藤 蘭香 (麗澤大学)
15:00-15:30	「擲銭法による易占での使用硬貨に関するノート」 大橋 一隆 (松土社企画)	「日本の公立中学校に勤めるALTの同僚性に関するナラティブ研究」 坂本 南美 (岡山理科大学)	「地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ループリックに関する実践的研究 (2)—学生の自己評価分析から見える成果と課題—」 鈴木舜・佐藤大介 (くらしき作陽大学)・高橋香代 (岡山大学)
15:40-17:30 (501教室)	シンポジウム：文学は医療に貢献できるか～物語・文体・認知の視点から～ 講師：小比賀 美香子 (岡山大学医学部総合内科学講座)・奥 聡一郎 (関東学院大学) 奥田 恭士 (兵庫県立大学)・寺西 雅之 (兵庫県立大学)		
17:30-17:50 閉会式・総会 (501教室)			
18:30-20:30 懇親会 (キリンビール横浜工場レストラン ビアポート) 会費：6000円 (学生3000円)			

研究発表及び講演概要 目次

午前の部..... 1

Session 1 9:30-10:30..... 1

[402 教室] 9:30-10:30.....	1
ディベートの文体：米大統領選テレビ討論会の分析を題材に	1
ラオスにおける法整備に向けた法学教育の現状と課題—首都と地方の比較研究—.....	1
[403 教室] 9:30-10:30.....	2
図書館での「ぬいぐるみお泊まり会」活動から考える不可知論—科学的思考と想像力の境界線..	2
読後ディスカッションで何が語られているのか：書記記録分析の試み.....	2
[507 教室] 9:30-10:30.....	3
演劇ワークショップが大学生のコミュニケーションに対する態度に与える影響—定性データに基づいた分析—.....	3
The Effects of Pushed Output Activity in Written Recall Task.....	3

Session 2 10:40-11:40..... 4

[402 教室] 10:40-11:40.....	4
大学入試センター試験が映し出す英語—電子コーパスとして読む英語問題	4
英検二次面接試験「準2級」の絵の描写で用いられる動詞の特徴.....	4
[403 教室] 10:40-11:40.....	5
地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ループリックに関する実践的研究（1） —学修プロセス構造の可視化を目指して—	5
日本の伝統芸能「落語」が海外での日本語教育におよぼす効果.....	5
[507 教室] 10:40-11:40.....	6
新学習指導要領における英語音声指導内容の検討— “intelligibility” の概念整理をとおして—	6
英語スピーキングの流暢さを促す指導の工夫.....	6

午後の部..... 7

Session 3 13:20-14:50..... 7

[402 教室] 13:20-14:50.....	7
新聞報道とグローバル人材	7
英国の地方都市における移民問題	7
関西福祉大学における文章力向上の取り組みについて	7
[403 教室] 13:20-14:50.....	8
Reinvigorating the Liberal Arts as Transformative Praxis in the Japanese University.....	8
Censoring National Shame: A Comparative Lesson on Japanese Postwar Denial of the Wartime Effort to Eradicate Korean Culture with American Unwillingness to Confront the	

Aerial Bombing of Civilian Populations in Japan, Korea and Southeast Asia	9
On Teaching Multiliteracies and Multiperspectivism.....	10
ワークショップ [404 教室] 13:20-.....	10
大人にもアニメーション！ースペイン式読解力育成のすすめ	10
Session 4 15:00-15:30.....	11
[402 教室] 15:00-15:30.....	11
擲銭法による易占での使用硬貨に関するノート	11
[403 教室] 15:00-15:30.....	11
日本の公立中学校に勤める ALT の同僚性に関するナラティブ研究.....	11
[507 教室] 15:00-15:30.....	11
地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ルーブリックに関する実践的研究（2）ー学生の 自己評価分析から見える成果と課題ー.....	11
シンポジウム [501 教室] 15:40-17:30.....	12
文学は医療に貢献できるか～物語・文体・認知の視点から～	12
招聘講演要旨 「医療におけるナラティブ」	12
ポスターセッション [506 教室] 11:40-12:30.....	13
1. A Survey of Backgrounds, Lifestyles, and Opinions on English Language Education among Students at a University in Japan	13
2. 鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科 特別実習 I 成果報告	13
3. 姫路におけるベトナム定住難民の教育機会とキャリア形成に関する研究.....	13
4. 高大連携による持続可能な次世代エネルギーの可能性についての研究.....	14
5. 「多読」を背景としたクリエイティブ・ノンフィクション・ワークショップ.....	14
6. オーラルヒストリーによる英語学習法に関する質的研究：「音読」の効果について.....	14
7. 文学作品における登場人物の呼称および言及に関する考察.....	15
8. 英語多読成功者の証言①：50万語、100万語読むと何が変わるのか.....	15
9. ポストモダニスト絵本を活用した英語教育：その実践例と教育的効果の分析.....	15
10. 世界観に関する一考察 智と芸術への旅 2.....	15
11. 英語多読成功者の証言②：50万語、100万語読むと何が変わるのか.....	16
12. Verification of a Link Between Reading Experience in Japanese and English Proficiency	16
13. 米国におけるヘルス・リテラシー教育の特徴と課題 ーイリノイ州、シカゴ市の取り組みに 注目してー.....	16
14. 医学部における医学英語教育及びサンプル教材の検討.....	17

研究発表及び講演概要

午前の部

Session 1 9:30-10:30

[402 教室] 9:30-10:30

ディベートの文体：米大統領選テレビ討論会の分析を題材に

金谷 和香 兵庫県立大学 学生

寺西 雅之 兵庫県立大学 教授

文部科学省が高校英語にディベート中心の新設科目を検討する等、英語によるスピーキング力の育成は益々重要度を増している。英語学習教材に関して言えば、バラック・オバマ前大統領のスピーチの教材化等が示す通り、政治家によるスピーチへの注目度は高いが、同じ政治であってもディベートが取り上げられることは比較的少ない。そこで本発表では、2016年の米大統領選においてドナルド・トランプ氏とヒラリー・クリントン氏が行ったテレビ討論会を取り上げ、まず両候補者の英語の文体的特徴について分析を行う。また、それぞれの文体とその視聴者への影響、さらには会話やディベート教育への応用の可能性についても分析・考察を行う。

ラオスにおける法整備に向けた法学教育の現状と課題—首都と地方の比較研究—

乾 美紀 兵庫県立大学 准教授

橋本 英司 兵庫県立大学 学生

本発表の目的は、東南アジアの途上国ラオスの高等教育機関における法学教育の実態と課題を明らかにするものである。法整備の途上にあるラオスにおいて、これまでどのように法学教育がなされ、そのなかで何が問題点として考えられてきたのか、そしてその問題点を改善するために現在どのような取り組みがなされているだろうか、これらのことを都市部と地方の高等教育機関を比較しながら解明していく。

図書館での「ぬいぐるみお泊まり会」活動から考える不可知論 -科学的思考と想像力の境界線

杉本 裕代 東京都市大学 講師

アメリカの図書館で行われている「ぬいぐるみお泊まり会」(Stuffed Animals Sleepover) は、2010年以降、日本の図書館でも様々な形で導入され、人気イベントとなっている。本発表は、申請者が運営協力者として2015年から参加している世田谷区立中央図書館での「ぬいぐるみお泊まり会」の実践を通じて、子どもたちの反応などを参考にしながら、この活動が、子どもたちの科学的思考や想像力、ひいては、不可知の存在とどのように向かい合うかを考える思考訓練の場として、どのように機能するか考えたい。

読後ディスカッションで何が語られているのか：書記記録分析の試み

草薙 優加 鶴見大学 教授

深谷 素子 鶴見大学 准教授

小林 めぐみ 成蹊大学 教授

本発表者は多読を基盤に英語力向上のみならず、自律的・主体的な読み手の育成、読書コミュニティの創生、より深い思考を促す読書活動を実践してきた。その中で見出した効果的な活動の一つに、対話の参加者が自由に意見を述べて「集合知」を生み出すディスカッション活動 World Café がある。本発表では、英語絵本 *Voices in the Park* を題材として行った World Café で、実際に何が生み出されているのかを、二つの参加者グループ（教員・研究者と大学生）の結果比較から考察し、教育上の課題と手立てを提案する。

演劇ワークショップが大学生のコミュニケーションに対する態度に与える影響—定性データに基づいた分析—

岩中 貴裕 山口学芸大学 准教授

本研究の目的は劇を創って上演するというプロセスが大学生のコミュニケーションに対する態度に与える影響を明らかにすることである。調査参加者は5~6人で構成されるグループで劇を創って上演するというプロセスに従事した。調査開始時と調査終了時に調査参加者の「コミュニケーション不安尺度」と「協同作業認識尺度」を測定した。また調査終了時に演劇を創るというプロセスを通して学んだことをレポート提出するように指示した。本発表では、レポートをQDAソフトで分析した結果の一部を報告する。

The Effects of Pushed Output Activity in Written Recall Task

マーティン 宏美 文教大学 講師

This study investigates the effects of output with noticing in a written recall task. The participants were 56 university students who are enrolled in a course of listening and speaking. For the study, 20 out of the 56 students' data were collected. The participants were divided into two groups: an input-only group and an input-output-input group. They carried out a multi-stage written recall task. They listened to the same passage twice, and rewrote it. The result revealed that the input-output-input group was affected by noticing in their output recall protocols more than the input-only group.

Session 2 10:40-11:40

[402 教室] 10:40-11:40

大学入試センター試験が映し出す英語—電子コーパスとして読む英語問題

北 和丈 東京理科大学 准教授
檜村 真由 東京工業高等専門学校 准教授
伊澤 高志 立正大学 専任講師
佐藤 繭香 麗澤大学 准教授
瀧口 美佳 立正大学 特任講師
土屋 結城 実践女子大学 准教授

大学入試センター試験に用いられる英語は、受験者の視点から問題としての難易度等を分析して消費される対象でこそあれ、日本の英語学習者の多くに「英語」という言語の典型像を示してきた発信者としての側面が省みられることはなく、あまつさえその像の代表性や妥当性が論じられることはほぼ皆無である。本発表は、総体として電子コーパス化した大学入試センター試験の英語問題を、ほかのいくつかの電子コーパスと比較・分析することで、前述の問題に取り組むうえでの足掛かりを得ようとする試みである。

英検二次面接試験「準2級」の絵の描写で用いられる動詞の特徴

竹野 純一郎 中国学園大学 准教授
松浦 加寿子 中国学園大学 講師

本研究では、高等学校卒業段階で到達しておきたい英語力である英検準2級を取り上げ、英検二次面接試験の絵の描写で用いられる動詞を分析することで、そこに現れる動詞の頻度や用いられ方などの特徴を示した。英検準2級の二次面接試験で使用される問題カードには二つの絵が記載されており、それぞれ描写を求める設問がある。今回の分析では、2007年度第1回から2016年度第2回までの10年間分のデータを用いた。

地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ルーブリックに関する実践的研究（1） 一学修プロセス構造の可視化を目指して一

佐藤 大介 ぐらしき作陽大学 講師

鈴木 舜 ぐらしき作陽大学 講師

高橋 香代 岡山大学 教授

本発表は、本学での平成26年度「地（知）の拠点整備事業」における学生による様々な地域貢献活動に対して共通活用できるルーブリックの開発に関する実践的研究の報告である。学生による自己評価を促すルーブリック開発を試案し、実践力・対人関係力・地域志向への主体性に関しての成長プロセス＝学修プロセスを学生が確認しながら次のステップに進むことが可能な尺度設計・記述を行い、到達目標を明確にしたルーブリックを開発した。

日本の伝統芸能「落語」が海外での日本語教育におよぼす効果

阪田 昌樹 兵庫県立明石西高校 教諭

松田 眞奈美 兵庫県立明石西高校 教諭

大内 幹雄 兵庫県立大学 教授

発表者は数年前から「英語で自己表現する」手段として「英語落語」に着目し、現在は「英語表現Ⅰ」の授業で「英語落語」を副教材とした指導を実践している。3年前にオーストラリア・パースをボランティア訪問し「英語落語」を紹介する機会を得た。以来、現地で日本語を学ぶ学生を対象に日本語の小噺（ショート落語）を題材とした日本語指導を展開している。本発表では「英語落語を通じた英語指導」の逆バージョンともいえる手法が現地の日本語教育にどう影響をおよぼしたのかを報告する。

新学習指導要領における英語音声指導内容の検討ー “intelligibility” の概念整理をとおしてー

和田 あずさ 兵庫教育大学 助教

新学習指導要領では、従来以上に音声に関する内容が詳述されており、音声指導をより重視していることがうかがえる。本発表では、英語音声指導における共通認識としての「intelligibility」の概念整理をとおして、新学習指導要領の音声指導内容を批判的に検討するとともに、今後の音声指導に対する教員の認識に関する事例を紹介する。

英語スピーキングの流暢さを促す指導の工夫

麻生 雄治 長崎県立大学 准教授

昨今の日本の英語教育ではこれまでよりスピーキングが注目されるようになり、授業でも英語を話す練習をする機会が増えつつある。英語スピーキング力を高めるにはまず流暢さを鍛えるべきとする指摘があるが、具体的にどのような練習が流暢さを促すことに効果があるだろうか。本発表では、スピーキングの流暢さを高める指導（練習）において、①ワードカウンターの使用の有無の違いによる効果、②ブレ・スピーキング活動の違いによる効果、③話すテーマの違いによる効果について述べる。

午後の部

Session 3 13:20-14:50

[402 教室] 13:20-14:50

新聞報道とグローバル人材

大西 好宣 千葉大学 教授

今世紀に入り、それまでの「国際人」に代わって「グローバル人材」という言葉が頻繁に用いられるようになり、教育界ではその育成方法や現状評価についての議論が年々活発になって来た。そこで本発表ではまず、グローバル人材育成のための政策や世論の移り変わりについて主要な先行研究を紹介する。そして、主要なマスメディアの報道を振り返りつつ、具体的な数値やエビデンスを示しながらグローバル人材をめぐる議論の功罪を考察したい。

英国の地方都市における移民問題

庄司 俊恵 大阪経済法科大学（非）

イギリスの地方都市ルートン（Luton）はロンドンから北へ約 50 km に位置し、ロンドンへのアクセスがしやすい。また空港も完備している。実態は 2004 年にイギリス国内で最悪の場所という調査結果が出た。その後、治安は少し回復したが依然犯罪率は高い。イスラム系移民が多く人口 20 万人中、約 5 万人がイスラム教徒である。[2011 年当時] 2017 年 3 月ウェストミンスター橋近くで起きたテロの実行犯がルートンと関わりある人物であり、他のテロ事件もルートンのイスラム過激派が関与していたことがあり、ジハードの温床地と非公式に言われている。

関西福祉大学における文章力向上の取り組みについて

溝端 剛 関西福祉大学 教授
上野 輝夫 関西福祉大学 教授
半田 結 関西福祉大学 教授
有田 伸弘 関西福祉大学 准教授

関西福祉大学では、平成 28 年度に自主講座として「文章力養成講座」を実施した。平成 29 年度は、その効果を踏まえ、さらに発展させる形で、「キャリア形成Ⅰ」（前期）及び「キャリア形成Ⅱ」（後期）という 1 年次生必修科目の中で、日本語力（国語）の向上に取り組んできた。発表では、その概要と、各学期に実施した Pre-test、Post-test の結果を踏まえた授業の効果、添削指導を通じた大学 1 年次生の文章力の現状と課題について報告する。

Reinvigorating the Liberal Arts as Transformative Praxis in the Japanese University**David Kennedy** 日本大学 准教授

This paper examines the current state of foreign language education in Japanese universities as illustrative of the troubling conditions facing the liberal arts (i.e. the transformative arts) in a globalized neoliberal milieu. While utopian ideals in education have long insinuated pedagogies that inspires personal agency, creative investment, challenge to power, and social change, this imagining of incalculable futures has over the past few decades been steadily eroded by the seemingly inevitable and confluent forces of a hyper-networked world, represented most forcefully by the socioeconomic reductionism of neoliberal globalist determinism. This paper proposes a reinvigoration of constructive and engaged pedagogies of resistance to these trends, encouraging a repositioning of Japanese learners within sustainable, self-creating discourses—those fostering critical engagement and enabling heightened possibilities for trans-generational transformation of cultures.

Censoring National Shame: A Comparative Lesson on Japanese Postwar Denial of the Wartime Effort to Eradicate Korean Culture with American Unwillingness to Confront the Aerial Bombing of Civilian Populations in Japan, Korea and Southeast Asia

Charles Cabell 東洋大学 准教授

One way to help students deal with histories of state violence against others that they may consider to be ‘shameful’ is to place such episodes within a comparative framework that allows them to see how national subjects in a removed setting confront such violence. Seeing how social structures provide powerful actors with opportunities to speak and control dominant discourses while silencing voices of dissent helps students realize the moral imperative to try to listen and empathize with minority groups (such as foreigners) referred to within postcolonial theory as the subaltern.

In this presentation, I provide a thorough overview of the well documented historical evidence supporting Japanese efforts, led by colonial administrator MINAMI Jiro, to eradicate Korean culture at the end of WWII by abolishing Korean names, family structures, religion and language. Japanese students are astonishingly ignorant of this violence, whose memory remains central to Korean identity today.

American students are similarly ignorant of the use of indiscriminant carpet bombing intended to kill maximum numbers of civilians in Japan, Korea, Vietnam, Laos and Cambodia, and have seldom considered the ethical questions that arise when bombing largely defenseless populations through the air. They are similarly ignorant of the aftermath of such violence, including the overwhelming trauma that follows. Scholars and activists, of course, are much more willing to confront uncomfortable historical facts and provide students with models of how to distinguish patterns of cruelty within nations while still recognizing their praiseworthy qualities.

Students emerge from these comparative lessons with a heightened awareness of disparate forces within nations and the need to vigilantly monitor how state power is exercised. They also become aware of the suffering of others caused by their own nation states and are encouraged to find ways to acknowledge it and recognize similar manifestations of violence in the present.

On Teaching Multiliteracies and Multiperspectivism

Joff P.N. Bradley 帝京大学 准教授

Having students think philosophically in the foreign language class in Japan about postmodernism or poststructuralism might appear any impossibility for some and a waste of time for others. However, this presentation contests this view by proffering a multiliteracies approach to the problem of considering different points of view. Although having students adopt different perspectives (feminism, post-colonialism and all the other isms) seems fraught with numerous difficulties, in this presentation I set out a critical media and multiliteracies approach to the problem at hand, suggesting some ways in which various media and different forms of multiliteracies (TV commercials, film, political cartoons etc.) may help inspire students to adopt alternative perspectives and to think critically about the world at large. For example, how might different genders, social classes, ages, colonial subjects and races, changing identities and viewpoints approach a particular set of problems? How might the perspective of feminism, LGBT, different subcultures or legal statuses inform a particular debate? What are the differences between the Western, Eurocentric view of knowledge and the Asian-centred or multicultural stances? We shall end by asking the philosophical question: Is it possible to understand the whole?

ワークショップ [404 教室] 13:20-

大人にもアニメーション！ースペイン式読解力育成のすすめ

河西 由美子 鶴見大学 教授

「読書へのアニメーション」とは、1980年代にスペインのマリア・モンセラット・サルト（Maria Montserrat Sarto）氏が開発した若い世代の読む力を育てるメソッドです。日本には2000年ごろに紹介されました。児童からティーンエイジャーが対象ですが、大学生や成人など、すべての世代の読者に、自らの読む力を見直すワークショップとして好評です。今回は絵本を用いた体験講座を実施いたします。

Session 4 15:00-15:30

[402 教室] 15:00-15:30

擲銭法による易占での使用硬貨に関するノート

大橋 一隆 松土社企画 座長・世話人

易占において、硬貨を投げてその裏表により卦を得る方法を擲銭法という。実占における硬貨としては、乾隆通寶等の清朝の古銭や専用の風水銭が好まれることが多い。本質的には裏表のある手頃な大きさの硬貨であれば良いので、本研究では、これまでほとんど用いられることのなかった近代日本硬貨について取り上げる。近代日本硬貨を使用する利点としては、並品以下の物の活用や易の海外への紹介が容易になる等のメリットがあげられる。本発表では、近代日本硬貨を活用するための目安について考察する予定である。

[403 教室] 15:00-15:30

日本の公立中学校に勤める ALT の同僚性に関するナラティブ研究

坂本 南美 岡山理科大学 准教授

日本の学校に勤める ALT（Assistant Language Teacher：外国人指導助手）は英語教育において重要な役割を担っている。その中で、姉妹都市との交流で来日したアメリカ人 ALT が中学校でのティームティーチングの英語授業を通して、JTE（Japanese Teacher of English：日本人英語教師）との同僚性を育みながら授業の実践力をつけていく様子を彼のナラティブから質的に探求する。

[507 教室] 15:00-15:30

地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ルーブリックに関する実践的研究（2）—学生の自己評価分析から見える成果と課題—

鈴木 舜 ぐらしき作陽大学 講師
佐藤 大介 ぐらしき作陽大学 講師
高橋 香代 岡山大学 教授

本発表は、「地域貢献活動のための自己評価を促すコモン・ルーブリックに関する実践的研究（1）」において開発したルーブリックを活用した学生による自己評価分析の報告である。2016年度入学生へ2016年10月、2017年1月に行った自己評価、及び2017年度入学生へ2017年4月、7月、2018年1月に行った自己評価結果を分析し、地域貢献活動による学修プロセスを可視化するための指標としての成果と課題について検討し、コモン・ルーブリックの改良を図る。

シンポジウム [501 教室] 15:40-17:30

文学は医療に貢献できるか～物語・文体・認知の視点から～

小比賀 美香子 岡山大学医学部総合内科学講座 助教

奥田 恭士 兵庫県立大学 教授

奥 聡一郎 関東学院大学 教授

寺西 雅之 兵庫県立大学 教授

本シンポジウムでは、文学と医療・看護分野の接点である「ナラティブ・メディシン」に焦点をあて、物語・文体・認知の視点から医療における文学の役割および貢献の可能性について考える。まず基調講演では、小比賀美香子氏が医療現場におけるナラティブの意味と活用例について問題提起し、引き続き奥田恭士氏、奥聡一郎氏、および寺西雅之氏が物語論、文体論等それぞれの視点から具体的な分析事例を提示する。取り上げるテキスト候補は、カズオ・イシグロの小説（文学）、ライフレビュー（介護老人保健施設入所者による語り）、さらに文学と非文学の間ジャンルである『潜水服は蝶の夢を見る』、『脳に棲む魔物』等である。4名の講演・発表に続き、フロアの質疑を含めて活発な意見交換を行いたい。

招聘講演要旨 「医療におけるナラティブ」

小比賀 美香子

医療におけるナラティブ・アプローチには、欧米を中心に複数の流れがある。そのうち、リタ・シャロンのナラティブ・メディシンは、「病いのストーリーを認識し、吸収し、解釈し、それに心動かされて行動するというナラティブ・コンピテンス（物語能力）を通じて実践する医療」と定義される。その主要概念は、Attention（配慮）、Representation（表現）、Affiliation（参入）である。本発表では、ナラティブ・メディシン・ワークショップへの参加経験と、物語能力の涵養のために始めた医学生向けのトレーニングについても紹介し、文学が医療にどのように貢献できるのか、医療現場から、内科医・医学部教官という立場で考えてみたい。

ポスターセッション [506 教室] 11:40-12:30

1. A Survey of Backgrounds, Lifestyles, and Opinions on English Language Education among Students at a University in Japan

内山 八郎 同志社大学 全学共通教養教育センター 准教授
 大内 幹雄 兵庫県立大学 総合教育機構 教授
 市川 一夫 兵庫県立大学 総合教育機構 特任教授
 高木 繁光 同志社大学 全学共通教養教育センター 教授

The primary objective of this presentation is to outline key results of the survey carried out among students taking Intensive Courses for TOEFL (I.C.T.) at Doshisha University in Kyoto, Japan. The survey, consisting of 61 questions, was designed and implemented in July 2017 to elucidate tendencies and associations on the respondents' (1) backgrounds, (2) behaviors/experiences, and (3) opinions/wishes with regard to English language education. The total of 113 respondents participated in the study. The presentation aims to provide evidence-based information on the above-mentioned categories of variables as well as to highlight meaningful statistical associations so as to yield more thorough and comprehensive “lens” through which to not only examine the circumstances and situations surrounding the respondents but also highlight potential topics for future studies.

2. 鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科 特別実習 I 成果報告

鶴見大学 × 横浜美術館美術情報センター 「ひろがる源氏 つながる古地図」

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科 特別実習 I 履修学生一同

前期(8月4日-9月13日)と後期(9月15日-11月5日)の2種類の展示を企画しました。特別実習 I の履修学生は、前期「ひろがる源氏」の展示企画に参加し、資料の選定、調査、解説文の準備、ならびに開催期間中は来場者に向けた資料解説を行いました。一連の学習の成果報告を行います。

3. 姫路におけるベトナム定住難民の教育機会とキャリア形成に関する研究

青山 佳恋 兵庫県立大学 学生
 井川 真里 兵庫県立大学 学生
 橋本 英司 兵庫県立大学 学生
 堀越 亮公 兵庫県立大学 学生
 西川 真由 兵庫県立大学 学生

姫路市にはかつて難民定住促進センターがあったため、2,000人近くのベトナム定住難民が生活している。彼らを取り巻く環境は依然厳しく、教育や就労の機会は限定されている。子どもたちは親の職業を受け継ぐであろうか。それとも新しいキャリア形成を築いていけるだろうか。地域の教育支援者や当事者へのインタビューにより明らかにする。

4. 高大連携による持続可能な次世代エネルギーの可能性についての研究

竹下 浩子 愛媛大学教育学部 准教授
 今村 誠宏 愛媛県立松山東高等学校生徒
 岡本 千奈 愛媛県立松山東高等学校生徒
 永田 果子 愛媛県立松山東高等学校生徒
 渡部 陸人 愛媛県立松山東高等学校生徒
 田中 萌愛 愛媛県立松山東高等学校生徒
 藤家 瑠那 愛媛県立松山東高等学校生徒
 藤内 怜奈 愛媛県立松山東高等学校生徒
 相原 愛里子 愛媛県立松山東高等学校生徒

松山東高校と愛媛大学は、文部科学省スーパーグローバル・ハイスクール（SGH）の一環で高大連携の研究を行っている。本発表では、平成29年から行っているソーラークッカーの開発について報告する。ソーラークッカーは、火を使うことなく太陽の集熱だけで水を沸騰させたり、調理をすることを可能とする。発展途上国では燃料資源の代わりや煮沸消毒などの衛生上の問題の解決が期待できる他、日本では避難所での利用が報告されている。本研究は、再生可能エネルギーの可能性について広く市民に伝えることを目的とし、ドイツ・フライブルグの高校生とのテレビ会議での情報交換などを通して、実際に身近な材料からソーラークッカーを製作している。

5. 「多読」を背景としたクリエイティブ・ノンフィクション・ワークショップ

杉本 裕代 東京都市大学 講師

申請者は、東京都市大学において、多読を通じた英語教育を実践し、それを創作英語絵本の制作につなげる試みを2016年から行っている。こうした実践のなか、言葉から visual association（頭の中で視覚的イメージを立ち上げること）を引き起こすための訓練など、理系・文系を問わず、学生たちが抽象的思考や、物事を客観的・メタ的にとらえる思考を育てるための方策へのヒントがあると考えている。日本では、後回しにされがちなクリエイティブ・ライティングの日本での展開を意識しながら、STEM教育の融合など、アメリカでの実践例を紹介しながら、カリキュラム作成のための意見交換を行いたい。

6. オーラルヒストリーによる英語学習法に関する質的研究：「音読」の効果について

那須 雅子 岡山大学 准教授

発表者は、オーラルヒストリーの手法を援用し、外国語学習の成功者を対象にその学習履歴や体験に関する口述インタビューを実施し、約40名のデータを蓄積した。本発表では、これらの口述記録の分析結果に基づいて、日本人学習者にとって有効な学習法を特定するとともに、特に「音読」によって高度な英語力を身に付けた学習者のインタビューを抽出し報告する。

7. 文学作品における登場人物の呼称および言及に関する考察

笠本 晃代 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

発表者は、これまでに小説や戯曲、映画の SCRIPT を題材にして、人に対する固有名詞の使用や人称代名詞および代名詞的な表現の使用を観察してきた。そして、数ある用例の中でもとりわけ一般的に例外であるものに注目し、その用法とそれらが用いられる背景・要因を分析した。今回の発表では、オスカー・ワイルドなどの文学作品における登場人物の呼称および言及に関する考察を行いたい。

8. 英語多読成功者の証言①：50万語、100万語読むと何が変わるのか

浅山 郁美 鶴見大学 学生

西川 未来 鶴見大学 学生

本発表では、鶴見大学文学部英語英米文学科にて英語多読を実践し、50万語、あるいは100万語達成した学部生が、英語多読によってそれぞれの英語力、あるいは読書力にどのような変化があったのかを証言する。多読を始めた目的、始めた当初の多読に対する印象、その後の心理面、英語力面での変化に加え、多読のデメリット、必ずぶつかる停滞や壁、それをどのように乗り越えたのかなど、経験者でなければわからない多読に関する生の体験を紹介する。

9. ポストモダニスト絵本を活用した英語教育：その実践例と教育的効果の分析

鎌田 那奈 兵庫県立大学 学生

寺西 雅之 兵庫県立大学 教授

本発表では、ポストモダニスト絵本を用いた英語教育の効果と課題について論じる。これまで絵本は、幼児等低年齢の学習者向けの教材と考えられ、成人英語学習者を対象にした授業での使用に関しては概ね消極的であった。その一方で、Gillian Lazar 等の専門家が指摘するように、ポストモダニスト絵本と言われるジャンルの作品は、絵と言葉の関係が従来の絵本とは異なる等斬新で逸脱した構造を持ち、英語学習者の知性を刺激するとともに、「ポストモダニズム」という文化的潮流の理解にも役立つ教材と成り得る。本発表では、このようなポストモダニスト絵本の代表である *Voices in the Park* を教材として用いて発表者が行った事例研究を基に、その英語教材としての潜在性について考察する。

10. 世界観に関する一考察 智と芸術への旅 2

大橋 一隆 松土社企画 座長・世話人

ありとあらゆる事象を知りつくしたいという根本的な欲求にもかかわらず、我々は現実生活に追われ、限られた世界観のもとで生きているのではないのか？無自覚のうちに、西洋文明を中心とした世界観にどっぷりと浸っているのではないのか？本発表では、大東亜戦争後の現代日本において、その多数が排除された東洋的世界観に関して、暦などの身近な題材を切り口として考察を試みる。

1.1. 英語多読成功者の証言②：50万語、100万語読むと何が変わるのか

石原 和加子 鶴見大学 学生

増子 拓海 鶴見大学 学生

本発表では、鶴見大学文学部英語英米文学科にて英語多読を実践し、50万語、100万語、そして100万語以上を達成した学部生が、その達成語数によって英語力、読書力等にどのような変化を感じているかを明らかにする。文教大学の千葉によれば、50万語達成は富士登山で、「挑戦する人は多くはないが、特別な訓練がなくても誰でも達成できる」一方、100万語達成はエベレスト登山であり、「達成は極めて困難だが、頂上では達成した者しか見ることのできない特別な景色が待っている」という。学生の実体験から検証を試みる。

1.2. Verification of a Link Between Reading Experience in Japanese and English Proficiency

Azumi Yoshida 兵庫県立大学大学院環境人間学研究科博士前期課程

Masayuki Teranishi 兵庫県立大学 教授

There are a large number of people who are poor at English or cannot speak English at all even though they have learned it for at least 6 years in junior and senior high school. The process of dealing with and understanding English as a foreign language has much to do with how high your Japanese skills are. Yoshifumi Saito, scholar of English literature, for instance, insists that “There is no foreign language that is beyond the mother language’s abilities. ... Higher abilities of a mother tongue enable people to master a foreign language to a high extent.” It is almost universally acknowledged that reading helps people gain great abilities of vocabulary, writing and reading comprehension. If you are sophisticated in Japanese, then you will present the same skills in English as well. On a basis of these theories, we would like to suggest a hypothesis; someone who reads many books shows greater abilities of Japanese, which will consequently lead to a higher level of English skills. We will try to verify this by conducting questionnaire and interviews with Japanese EFL learners.

1.3. 米国におけるヘルス・リテラシー教育の特徴と課題 —イリノイ州、シカゴ市の取り組みに注目して—

村山 拓 東京学芸大学 准教授

本発表では、米国の学校教育におけるヘルス・リテラシーの学習の内容と方法の特徴を検討する。とりわけ、イリノイ州、シカゴ市のカリキュラムにおける、障害や疾患、自身のヘルス・コントロールに関する学習課題の配列等に焦点を当てる。例えばイリノイ州では、校教育で獲得が期待される身体発達・健康スタンダードを設定し、実践が進められている。それらの検討から、障害、疾患といった健康不調の社会的理解を推進する取り組みの意義と課題を示し、わが国の障害理解教育や関連する取り組みへの示唆を探りたい。

14. 医学部における医学英語教育及びサンプル教材の検討

西村 真澄 岡山大学（非）、兵庫県立大学大学院環境人間学研究科博士後期課程

日本人医師の多くは、医学英語に問題を抱えており、言語の問題が医療過誤につながる恐れが指摘されている。本発表では、諸外国及び日本の医学部での医学英語の取り組みの現状について行った調査結果について報告する。また、発表者は、医療に必要と考えられる事項を検討し、**e-learning**に基づいた、幅広く利用可能な医学英語教材を作製中であるが、本発表では、特にその有効性を図るために検討中の実験案について紹介する。

鶴見大学 (鶴見大学 HP より転載 : <http://www.tsurumi-u.ac.jp/feature/univ/campus/>)

キャンパスマップ
Campus Map



学会会場
1号館

